



# まんだらげ

vol. **17**  
2011.6

特集

## 東日本大震災 支援活動報告



### ■看護師・助産師募集

和歌山県立医科大学附属病院では看護師・助産師を募集しています。

※募集等詳細につきましては当大学ホームページをご覧ください。または下記までお問い合わせください。

<http://www.wakayama-med.ac.jp>

公立大学法人和歌山県立医科大学 和歌山市紀三井寺811-1

電話：073-441-0711 事務局総務課

### 広報誌「まんだらげ」の名称について

和歌山を代表する江戸時代の外科医・華岡青洲が全身麻酔薬として用いた植物「曼陀羅華(まんだらげ)」から引用しています。花に「医」の文字をデザインしたものは、本学の校章にも採用されています。

### 理念

私達は患者さま本位で、質の高い医療を提供し、地域の保健医療の向上に貢献します。

### 基本方針

1 患者さまとの信頼関係を大切にし、安全で心のこもった医療を行います。

2 高度で先進的な医療の研究をすすめ、その成果を反映した医療を行います。

3 豊かな人間性と優れた専門技術を持った医療人を育成します。

4 地域の中核病院として、和歌山の保健医療を推進します。

## ■ 病院長挨拶

今年3月11日の「東日本大震災」発生後、当院では、和歌山県と連携し、11日深夜にはいち早く被災地へ災害派遣医療チーム(DMAT)を派遣しました。また、関西広域連合の協定により、和歌山県は岩手県を支援することが決定したため、3月19日からは救護班、メンタルケア、リハビリなどの様々なチームが交代で現地入りし、診療活動を展開しています。さらに被曝医療支援として福島県立医科大学附属病院への医師の派遣も行いました。

今後も当院総力をあげて支援を続けるとともに、被災されたみなさまの生活が一日も早く立て直されることを祈念いたします。



会議風景

和歌山県立医科大学附属病院  
病院長 / 岡村吉隆

## ■ 救護班活動についての報告

岩手県宮古市豊間根中学校を拠点に医師、看護師、薬剤師、事務局を1チーム体制とし、救護活動に取り組んでいます。

### 医師 職員室を仮設診療所に周辺避難所へ往診

#### 第2班 / 医師 太田文典

豊間根地区の中学校の体育館には300人近い住民が避難していました。この地域は沿岸地域ではないため、住民・住居被害は少なく、ほとんどが沿岸から逃れてきた住民でした。私たちは中学校の職員室に仮の診療所を設置し、そこを拠点に、周辺8カ所の避難所へ巡回往診を行っています。特に往診の際には、道が流されて場所がわかりづらく移動するのに苦労しました。

患者さんのほとんどが内科診療で、なかでも便秘や不眠などが目立ちました。インフルエンザなどの感染症の流行はありませんでした。



仮の診療室で被災した住民を診察する医師

### 薬剤師 お薬手帳の重要性を実感しました

#### 第1班 / 薬剤師 齊藤 喜宣

現地には、約130品目の薬剤を持参しました。仮設診療所では津波で薬を流された方々や体調をくずされた方々の調剤業務を行っていましたがしばらくすると、近隣の薬局が業務を再開しました。しかし、津波の被害にあっていない方々の中には、数種類の薬を1回分ずつ小分けしているケース(一包化)もあり、薬の名前を調べる(鑑別)のにかなり時間を要しました。「お薬手帳」を持っている方もおられ、それと同じ薬があればそれに対応し、なければ同効薬で対応しました。今回、「お薬手帳」の重要性をつくづく実感しました。



被災者一人一人の錠剤鑑別を行う薬剤師

## 事務局 被災地では時間の経過と共に医療ニーズが変化

### 第1班／事務局 城 泰成、林 豊記

和歌山県医務課や、被災地の活動拠点となる岩手県から情報を集約し、移動手段の段取りから、DMATや救護班が使用する食料や飲料水、衣類などの必需品の準備を行っています。救護班が現地で活動しやすく調整し、サポートするのが事務局の主な業務です。

特に被災地では時間の経過とともに医療ニーズが変わるので、情報収集が重要です。他の救護班らと情報交換を連日行いながら、交代救護チームへの申し送りを徹底し対応しています。



連日各地域の救護班が集まり情報共有しました

## 災害の精鋭部隊DMAT

DMAT / 看護師 高野裕子



和歌山県からの要請により、当院の災害派遣医療チームDMATは、3月11日の深夜和歌山を出発し大阪府伊丹空港から被災地岩手県へ出動しました。いち早く災害現場にかけつけ、救命医療を提供するのがDMATの任務です。今回の役割は①広域搬送計画、②拠点病院の医療支援、③がれきの下の医療などがあり、当院のDMATは花巻空港内に設置された臨時医療施設で、各地域のDMATと共に、重傷患者を被災地外の病院へ搬送する「広域搬送計画」に携わりました。被災地外病院へ飛行機で搬送する際、患者さんの病状を安定化させるための医療を行いました。また、臨時医療施設でのトリアージも行いました。

※DMATとは災害時、48時間以内に被災地へ駆けつけ、救急治療を行うための専門的な訓練を受けた災害派遣医療チーム

※トリアージとは災害時に多くの傷病者に対して負傷の程度に応じて治療の優先順位を決定する行為

## 被曝医療体制支援

救急集中治療部/医師 岩崎安博

福島県立医科大学附属病院は、東京電力福島第一原発で多数の被曝患者が出ても対応できるように体制をとるため、全国の医療機関に支援を要請。それに応じて3月20日当院救急集中治療部から医師を派遣しました。

現地には長崎や広島ほか全国から放射線・被曝・救急医療の専門家が集まり、お互いの専門知識を生かし、シュミレーション訓練を行い実際の患者搬送に備えました。

3月24日に放射能を帯びた水で被曝した3人の作業員を診察しました。防護服を着用し、救急車内に乗り込み、心身の状態を確認し、それから同病院に併設された被曝者除染・治療専用棟で、他のスタッフと共に作業員を何度もお湯で除染しました。その後、作業員らは千葉市にある放射線医学総合研究所で精密検査を受けました。その結果特に目立った症状がなかったため、まもなく退院となりました。

現地では医師や自衛隊員らが満足な食事もとらず、ほとんど家にも帰らず病院で待機していました。「命をかけて安全を守る、国を守る」「みんなで一致協力する」現場にはまさにそんな空気が流れていました。



## 被災者の心に寄り添う

こころのケアチーム/医師 辻 富基美



厚生労働省からの派遣要請により、和歌山県の「こころのケアチーム」の一員として、当院は4月18日～30日まで岩手県釜石市で活動しました。車

で避難所を巡回し、震災で精神的にも被害を受けた住民へのケアを行いました。被災者らの傍らで、悲惨な体験談に耳を傾け丁寧な受け止めました。安心して話せる体験がとても大切です。

ご家族を亡くし、住居を流され、ストレスフルな体験から、喪失感や抑うつに苦しむ方がいらっしゃいました。また慣れない避難所生活により、不眠や不安などを訴える方も目立ちました。今後深い心の傷によりフラッシュバック等に襲われるPTSD(心的外傷後ストレス障害)の増加を心配しています。今回、釜石の被災者の方とお会いし、我慢強さと優しさに感銘しました。大震災で多くが失われましたが、新たなつながりも生み出しています。今後も支援していきます。

## 被災ゴミで簡易スロープを

被災障害者支援/げんき開発研究所・助教・三井利仁



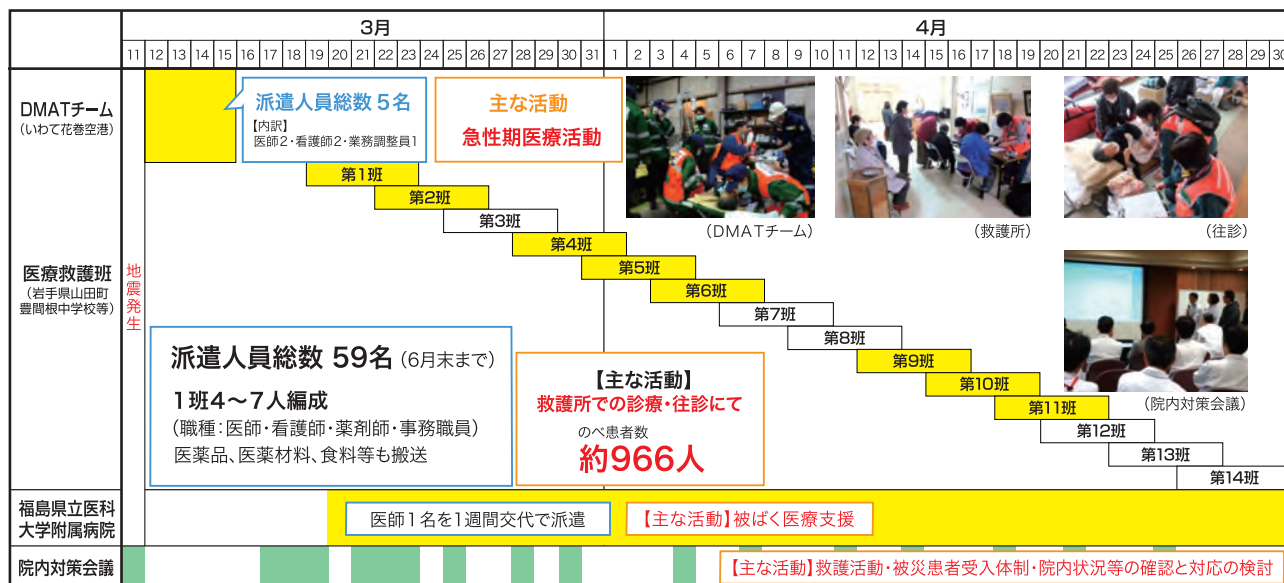
日本せきずい基金から日本脊髄障害医学会を通じて要請を受け、4月4日から7日まで宮城県での「被災障害者支援活動」に参加しました。

主な任務は気仙沼から南三陸町一帯の沿岸部において、せきずい損傷の患者さんや車イスを利用する被災障害者の安否確認です。約130名全員の安否を確認でき安心しましたが、車イスが流された障害者は、避難所で長く寝たきり状態のため、床ずれを多く確認しました。医師が治療を行い薬を提供しました。

また、避難所における配慮として、車イスで少しでも快適に暮らせるよう、被災ゴミの中から板などを拾ってきて簡易スロープを作りました。被災地では医療だけで解決できない課題が次々と発生します。現場にある限られた資源でいかに問題解決できるかが求められました。

現在ではバリアフリー化を施した福祉避難所が設置され徐々に環境が整いつつあります。

## 本院の主な活動状況



## 和歌山県立医科大学附属病院広報誌 まんだらげ〈vol.17〉

2010年6月発行

発行／和歌山県立医科大学附属病院  
〒641-8510 和歌山市紀三井寺811-1

TEL 073-447-2300

### 外来受付時間

- ・受付時間 午前8時50分～午前11時30分
- ・再診で予約のある方は指定時間(予約票の記載時間)
- ・休診日/土曜日・日曜日・祝日・年末年始(12月29日～1月3日)

次号発行は  
9月です。

【ホームページアドレス】 <http://www.wakayama-med.ac.jp/hospital> ※診療スケジュールは、ホームページからご覧いただけます。